

派生と屈折の順序付け

On Ordering in Derivation and Inflection

西原哲雄*

Tetsuo Nishihara

序

初期の生成文法理論においては、まず中心となる統語部門があり、音韻部門と意味部門は統語部門に付属するものとして考えられ、形態部門（語形成部門）は自立的な部門としてはみなされておらず、音韻部門の中に入れられていた。しかし、Siegel (1974) や Aronoff (1976) によって形態部門の自立性が認められて以来、生成形態論 (Generative Morphology) はさまざまな批判を受けながらも多くの語形成 (Word Formation) に係わる現象を説明し、発展してきた。こうした研究の発展の中で、音韻論と形態論の関連性を主張し、語形成過程と音韻規則を順序付け (Level Ordering) した理論である語彙音韻論 (Lexical Phonology, LP) が Kiparsky (1982)、Mohan (1986) などによって提唱された。

この理論では、語形成の派生過程と屈折過程が順序付けされており、派生接辞の内側に屈折接辞が付加されないという一般的な現象を説明している。しかしながら、諸言語を観察すると屈折接辞の外側に派生接辞が付加されるという現象が多く見られ、かならずしも派生—屈折の順序付けが守られていないことが分かる。Perlmutter (1988) などは派生と屈折を同じ語形成過程で行うことを破棄し、派生と屈折を分離する主張をしている¹⁾。本稿では、屈折接辞が派生接辞の内側に表れる傾向が非常に高いことを指摘しながら、Perlmutter (1988) の主張が適切でないことを論証する。

1. レベルオーダリングの語形成

Kiparsky (1982)、Mohan (1986) などによって提唱された語彙音韻論は、語形成に係わる形態部門 (Morphological Component) を独立した部門として認め、語形成過程を4つの層 (stratum) に分割している²⁾。

- (1) 層1 クラスⅠ接辞による語形成
- 層2 クラスⅡ接辞による語形成
- 層3 複合語形成
- 層4 屈折接辞付加

クラスⅠ接辞は強勢の位置決定に関与し、付加された語幹の強勢位置の移動を引き起す。

- (2) *cúrious* → *curiós-ity*Ⅰ
fínite → *ín*Ⅰ-*finite*

一方、クラスⅡ接辞は、付加されても強勢位置に影響を与えることはない。

- (3) *cúrious* → *cúrious-ness*Ⅱ
fínite → *finite-ly*Ⅱ

(1)から、クラスⅡ接辞はクラスⅠ接辞の外側に表れることはなく、また層1、2で形成された派生語や層3で形成された複合語の内側に屈折接辞が付加されることがないことが分かる。したがって、次のような語が存在しないことが予測される。

*非常勤講師

- (4) a. *event-less II -ity I
 *employ-ment II -al I
 b. *un II -[color-blind]
 *un II -[shock-resistant]
 c. *teach-es-er II
 *book-s-ing II
 d. *[hands-towel]
 *[flies-paper]

しかしながら、実際にはこれらの順序付けに従わない派生語や複合語が存在する。

- (5) a. develop-ment II -al I
 govern-ment II -al I
 b. in I -[conceive-able II]
 [un II -grammatical]-ity I
 c. non II -[color-blind]
 non II -[shock-resistant]
 d. [arms-merchant]
 [goods-train]

次節では、(5d) などで見られるような、屈折接辞が複合語の第1要素に付加され、複合語内部に存在するような例や、屈折接辞が派生接辞の内側に表れている場合について検討を加えることにする。

2. 屈折による語形成

一般的な語構成の過程としては、(6)のように屈折接辞は派生接辞の内側には決して表れない。すなわち、派生接辞は屈折接辞には付加されないと主張されてきた。

- (6) a. Word-Derivation-Inflection
 b. *Word-Inflection-Derivation

(6b) のような構造は一般的には認められないものであるが、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、イディッシュ語などでは(7)に見られるように(6b)の構造に従った語が存在する。

- (7) [masculine form] [inflected feminine form]
 a. (Fr.) maladroit maladroit+e
 b. (It.) certo cert+a →
 c. (Sp.) claro clar+a
 [inflected feminine form+ment]
 maladroit+e+ment (“awkwardly”)
 → cert+a+ment (“certainly”)
 clar+a+mente (“clearly”)

- [singular] [plural]
 d. (Por.) flor(“flower”) flor+es →
 e. (Yi.) šure(“line”) šure+es
 [diminutive(X+inhas)/adverb(X+vayz)]
 → flor+ez+inhas
 šure+es+vayz

さらに、英語やオランダ語、ドイツ語、イタリア語の複合語においても、第1要素の名詞に複数を示す屈折接辞が付加されている例が存在している。

- (8) a. English: [cloth-s brush]
 [park-s commissioner]
 [custom-s officer]
 b. Dutch: [dak-en zee]
 “sea of roofs”
 [huiz-en rij]
 “row of houses”
 [sted-en raad]
 “cities council”
 [student-en team]
 “students team”
 c. German: [Sonne-n schein]
 “sunshine”
 (n is plural ending of Sonne)
 d. Italian: [cap-i stazione]
 “station masters”

(7)、(8)から、屈折接辞の付加された屈折形(Inflected Form)が複合語形式や派生語形成の入力

となっていると言うことができる。このことは、屈折過程と派生過程が同一の部門で行われていることを示している。

3. 2つの屈折接辞

Perlmutter (1988)、Anderson (1992)などは、(5)などに見られるような派生と屈折の順序付けが破られている事実から、語形成部門では、派生と屈折は別々に取り扱われるべきだと主張している。すなわち、派生は語形成部門で、そして屈折は統語部門で処理されるべきだと述べている。(7)や(8)のような諸言語の現象を見ると、派生や複合語内部に見られる屈折接辞は複数を示す屈折語尾であることが分かる。このように複数を示す屈折接辞はその他の3人称単数を示す屈折語尾などの統語部門で付与される屈折接辞とは区別されるものである。Goodglass & Berko (1960)は失語症患者が示す音韻過程で、3人称単数を示す屈折語尾の方が、複数を示す屈折語尾よりも脱落しやすいと報告している。この音韻過程をKean (1977)は、失語症患者にとっては複数屈折語尾は“派生接辞”として取り扱われ、一方、3人称単数の屈折語尾は“屈折接辞”として取り扱われたためであると分析している。すなわち、屈折接辞のほうが派生接辞より語幹から離れているからであると述べている。失語症患者の音韻過程からも複数屈折接辞と3人称単数屈折接辞は区別されるべきものであることは明白である⁸⁾。

複数屈折接辞は“派生接辞的”に機能して、複合語形成や派生語形成に係わっていると考えることができる。また、Jensen (1990)も英語の複数屈折接辞の付加規則は語形成部門(派生)の一部であると述べている。したがって、(6a)に示された構造は諸言語についての“傾向”であって、言語自体に課される普遍的で強力な制約ではないと考えられる⁹⁾。

4. 原則と傾向

前節でみた(6a)に示された構造(派生—屈折という順序づけ)が諸言語についての“傾向”であって、強力な制約(原則)でないことはその他の制約(原則)というものが実際には例外なく完全に機能していないことから支持される。例え

ば、語彙音韻論(Lexical Phonology, LP)の語彙部門における制約(原則)である、構造保持(Structure Preservation, SP)や厳密循環条件(Strict Cyclicity Condition, SCC)などは、前者がMohan & Mohan (1984)で、後者は山田(1987)がその不備を指摘している¹⁰⁾。そして、Mohan (1988)は、明確にSPが制約(原則)としてよりも傾向として機能していると述べている。最近、注目をあびている最新の音韻理論である最適性理論(Optimality Theory, OT)の基本概念は制約(原則)の順序づけであるが、これらの制約(原則)もまた、基本的には、破られてもかまわないというものである。

5. 結語

以上、本稿では、派生接辞・屈折接辞の順序付けだけを認める、従来の考え方では不十分であり、屈折接辞・派生接辞という順序付けも認める必要があり、これらは絶対的な規則適用が求められる制約(原則)というよりも、規則適用が緩やかな傾向であることを指摘した。また、屈折接辞が複合語や派生語形成の入力になっていることから、Perlmutter (1988)などが主張するように、派生過程を語形成部門で扱い、屈折過程を統語部門で扱うというように2つに分離して考えることなく、いずれの過程も語形成部門で取り扱えることも論証した¹¹⁾。

(1997. 7. 8 受理)

NOTES

- 1) Perlmutter (1988)では分離形態論(Split Morphology)という用語を用いている。
- 2) Kiparsky (1982)は3層から成る語形成部門を提案している。
- 3) Booij (1996)は複数屈折接辞などを“Inherent Inflection”と呼び、3人称単数屈折接辞などを“Contextual Inflection”と呼び区別している。
- 4) Bochner (1984), Rice (1985)などでも同様の主張がなされている。
- 5) 詳しくは、Mohan & Mohan (1984)、山田(1987)を参照のこと。
- 6) Booij (1994, 1996)でも同様の提案がなされている。

REFERENCES

- Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT. Press.
- Anderson, S. R. 1992. *A-Morphous Morphology*. Cambridge: CUP.
- Bochner, H. 1984. "Inflection in Derivation". *Linguistic Review* 3, p.411-421.
- Booij, G. 1992. "Compounding in Dutch". *Rivista di Linguistica* 4, p.37-59.
- Booij, G. 1994. "Against Split Morphology". In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1993*. Dordrecht:Kluwer. p.27-50.
- Booij, G. 1996. "Inherent versus Contextual Inflection and the Split Morphology Hypothesis." In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1995*. Dordrecht: Kluwer. p.1-16.
- Goodglass, H. & J. Berko. 1960. "Agrammatism and Inflectional Morphology." *Journal of Speech and Hearing Research* 3, p.257-267.
- Hacken, P. 1994. *Defining Morphology*. Hamburg: Olms.
- Jensen, J. T. 1990. *Morphology*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Kean, M-L. 1977. "The Linguistic Interpretation of Aphasia." *Cognition* 5, p.9-46.
- Kiparsky, P. 1982. "From Cyclic to Lexical Phonology." In H. van der Hulst & N. Smith (eds.) *The Structure of Phonological Representations Part-I*. Dordrecht: Foris. p.131-75.
- Mohanan, K. P. 1986. *The Theory of Lexical Phonology*. Dordrecht: D. Reidel.
- Mohanan, K. P. 1988. "Universals in Phonological Alternations. Ms.
- Mohanan, K. P. & T. Mohanan 1984. "Lexical Phonology of the Consonant System in Malayalam." *Linguistic Inquiry* 15, p.575-602.
- 西原哲雄、1992、「語彙音韻論とロマンス借用語」『近代英語協会10年記念論文集』東京：英潮社、p.42-50。
- 西原哲雄、1994a、「複合語の屈折と慣用化」『ことばの音と形』東京：こびあん書房、p.230-238。
- 西原哲雄、1994b、「語構造のパラドックスと音律構造：語彙拡散理論との係わり」『甲南英文学』第9号、甲南英文学会、p.45-60。
- Perlmutter, D. 1988. "The Split Morphology Hypothesis: Evidence from Yiddish." In Hammond, M. & M. Noonan (eds.) *Theoretical Morphology*. San Diego: Academic Press. p.79-100.
- Rainer, F. 1996. "Inflection inside Derivation." In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1995*. Dordrecht: Kluwer. p.83-91.
- Rice, K. 1985. "On the Placement of Inflection." *Linguistic Inquiry* 16, p.155-161.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT. New York: Garland 1979.
- Vogel, I. 1991. "Level Ordering in Italian Lexical Phonology." In Bertinetto, P. M. & M. Kenstowicz (eds.) *Certamen Phonologicum II*. Torino: Resenberg & Sellier. p.81-101.
- 山田宣夫、1987、「厳密循環条件と英語の分節音韻論」『非線状音韻論研究』2号、p.63-82。